

# 令和3年度野生鳥獣の生息状況等調査事業

## 報告書要約版

### 1. 事業の目的

シカによる被害が甚大な保護林や近い将来に被害を受けるおそれの大きな保護林を主体にシカの生息密度調査・分析を行うとともに、希少植物を含む下層植生の保護・再生に向けた補助作業の試行等を行うことにより、今後の保護林等の適切な保全・管理の一助とする。

### 2. 事業の内容

事業の内容は①シカの生息密度調査、②簡易版チェックシート (Ver. 4) 検証、③植生の保護・再生、植生保護柵修繕と、3つの業務を実施した。それぞれの地域は表1に示すとおりである。

表1 事業実施地域

①シカの生息密度調査、②簡易版チェックシート (Ver.4) 検証	③植生の保護・再生、植生保護柵修繕
祖母山・傾山・大崩山周辺森林生態系保護地域	障子岳
綾森林生態系保護地域	洞岳
大森岳生物群集保護林	鬼の目山
鬼の目山生物群集保護林	諸塚村
霧島山生物群集保護林	

#### 2-1 生息密度調査

各地域の密度分布を図1に示す。各地域で生息密度が局所的に高い箇所が存在した。平均値は祖母傾大崩山地域で3.71頭/km<sup>2</sup>、綾・大森岳地域で6.56頭/km<sup>2</sup>、鬼の目地域で4.04頭/km<sup>2</sup>、霧島山地域で9.58頭/km<sup>2</sup>であった。なお、綾・大森岳地域では過年度より継続してシカの捕獲事業が行われ、その効果で生息密度が低く抑えられたメッシュが存在したが、捕獲が及ばなかったメッシュでは、高い値を示した。

また、祖母傾大崩山地域及び霧島山地域では、過年度調査との比較を行った。その結果、祖母傾大崩山地域では、多く確認されていた祖母山東側は減少し、傾山南側については高密度が続いていた。一方、霧島山地域では、かつては70頭/km<sup>2</sup>以上ものシカが、えびの高原周辺や大浪池周辺、御池周辺に生息していたが、今年度調査では最大でも27頭/km<sup>2</sup>であった。

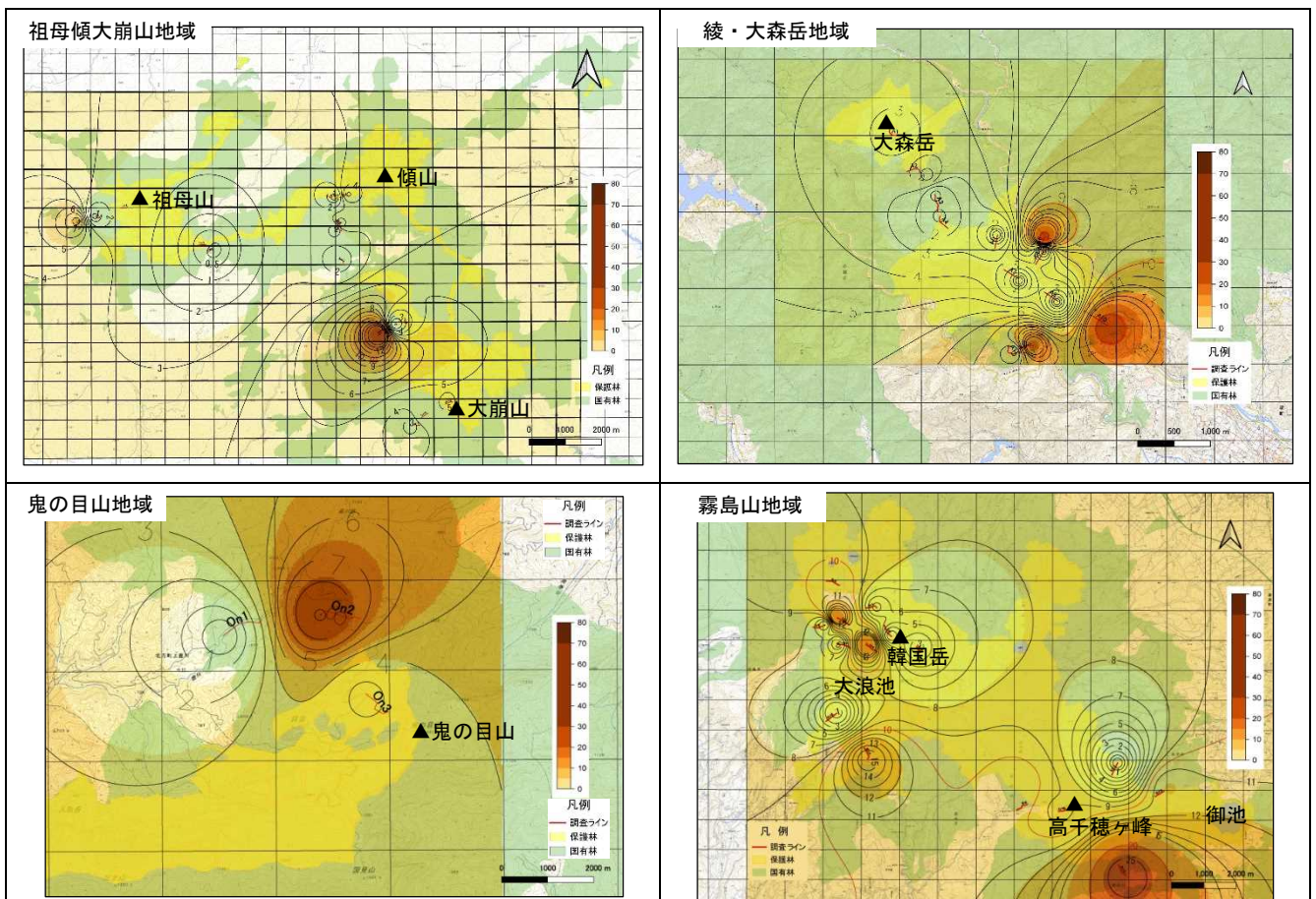


図1 各地域の生息密度分布

## 2-2 簡易版チェックシート Ver. 4 による評価レベルとシカ影響簡易調査票（森林総合研究所九州支所）によるシカ影響レベルとの比較検証

### 2-2-1 保護林における植生被害レベル

全地域で植生被害レベルは3又は4と判定された（図2）。森林構造に欠落や、低木層、草本層に加え亜高木層、高木層等の林冠構成種の一部が枯死し、森林としての階層構造に欠落が生じている状況であった。また、祖母傾大崩山地域、霧島山地域での過年度調査との比較の結果、両地域の植生の被害は進行しており、シカの生息密度がこのままの状態が継続した場合、被害レベルは更に進行し、被害レベル4に占める割合が一層増加するものと考えられる。

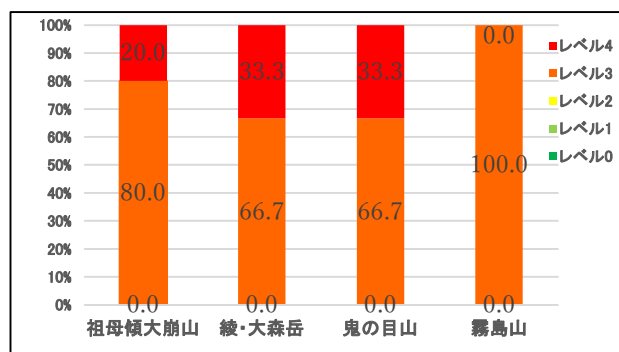


図2 植生被害レベル調査結果

### 2-2-2 チェックシート Ver. 4 とシカ影響簡易調査票との比較検証

簡易版チェックシート Ver. 4（以下、「Ver. 4」という。）の他、シカ影響簡易調査票（森林総合研究所九州支所）（以下、「簡易調査票」という。）との比較の結果、Ver. 4 と簡易調査票との間に乖離が生じた。Ver. 4 も簡易調査票も植生の被害やシカの生息状況も踏まえてのチェックシートではあるものの、加点方法の違いにより単純比較が困難であった。

## 2-3 植生の保護・再生、植生保護柵修繕

シカの被害から希少種等を保護するため、植生保護柵を設置した地点で効果の検証を行う共に、破損が確認された場合には修繕を行った。全ての地域で保護対象種の生育が確認された。洞岳及び鬼の目山では柵が破損しており、修繕を行った。また鬼の目山では、保護対象種の競合種の除伐を行った。

## 2-4 学識経験者への意見聴取

意見聴取対象者は、表2に示すとおりである。

表2 意見聴取対象者

氏名	職名、所属等	専門
岩本 俊孝	宮崎大学 名誉教授	哺乳類
宮本 句子	鹿児島大学 教授	植物
塩谷 克典	株式会社九州自然環境研究所 野生動物保護管理室 顧問	哺乳類、解析

（順不同、敬称略）

意見聴取結果概要は以下のとおりである。

- ・調査手法に関しては、計画書どおりで問題ない。
- ・昨年度は調査面積の都合上1ライン220mとしたが、今年度は440mとしても良い。

## 2-5 今後の課題

### 2-5-1 調査地点数について

現地調査の結果、局所的にシカの高密度地が存在した。このように生息密度の濃淡を明らかにし視覚化することで、関係者間での情報の共有化ができ、重点的なシカ捕獲地の意思決定が可能である。引き続き、シカの生息状況調査を行い、現実的な生息密度分布情報を得て、シカの捕獲に活かすことが重要である。また、高密度地の個体数を着実に減少させていく必要があると考えられる。なお、霧島山等の広い範囲では、保護林内でも調査ラインが設定できない場所があった。現実的かつより正確なシカの生息密度を表すためには、より多くの調査ラインの設定が望まれる。

### 2-5-2 保護対象種の調査について

保護対象種の生育・再生状況の確認には、比較のため過年度と同時期の調査を実施している。しかし種によっては早春に開花するなど過年度と同時期の調査が困難なものがあった。植生保護柵の効果を確認するため、確認時期が限られる種は開花期に合わせた調査の実施が望まれる。